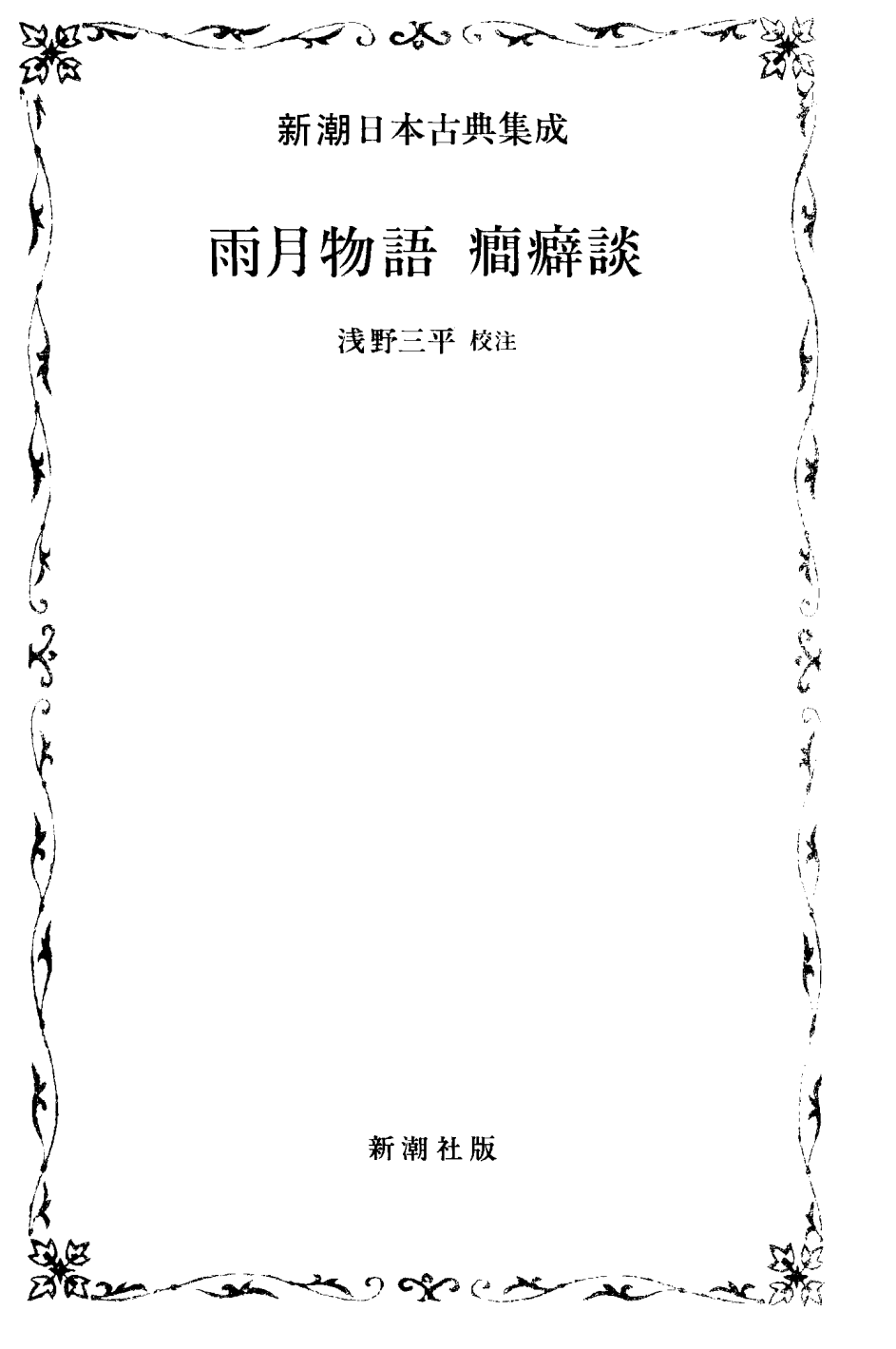


A decorative border with a repeating floral and vine motif surrounds the entire page. The border is composed of small, stylized flowers and leaves connected by a continuous line.

新潮日本古典集成

雨月物語 癩癖談

浅野三平 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第二二回)

うげつものがたり くせものがたり
雨月物語 癩癖談



定価一四〇〇円

昭和五十四年一月五日 印刷
昭和五十四年一月十日 発行

校注者 浅野三平

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
東京03(二六六)五一(業務)
電話 東京03(二六六)五四一(編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例 三

雨月物語 九

序 一〇

卷之一 一三

白 峯 二六

菊花の約 三六

卷之二 四九

浅茅が宿 六二

夢応の鯉魚 七二

卷之三 八四

仏 法 僧 九七

吉備津の釜 一〇四

卷之四	蛇性の姪	九
卷之五	青頭巾	一三
	貧福論	一四
癩癧談		一六
序		一六
上		一五
下		一七
解説	説 執着——上田秋成の生涯と文学	三九
付録		
	雨月物語紀行	二〇
	『伊勢物語』抜萃	二七

凡 例

一、本書に収めた『雨月物語』と『癩癖談』は、近世中期の文人上田秋成の作品である。その『雨月物語』の本文として、西尾市立図書館岩瀬文庫蔵の、京都梅村判兵衛・大坂野村長兵衛二肆合刻による、安永五年（一七七六）刊行の、半紙本五卷五冊よりなる初版本を底本とした。なお、校注者架蔵の安永五年板『雨月物語』の零本（欠巻部分の多い本）を適宜参照した。

『癩癖談』の本文としては、校注者架蔵の文政五年（一八二二）刊行の、皇都近江屋治助・東都前川六左衛門・大坂河内屋茂兵衛・同平七・今津屋辰三郎合刻本である半紙本上下二卷二冊を底本として用い、さらに架蔵の『癩癖談』の写本一冊と対校した。

一、できる限り底本に即して本文を校訂したが、現代の一般読者の便宜を考えて、次のように少し変更している。すなわち、本文中の漢字は、現行の通用漢字があるものは、それに従い、その他は、なるべく底本通りとした。

本文中の仮名づかいと振り仮名は、原則として歴史的仮名づかいによった。また、送り仮名も、なるべく現行の新しい送り仮名法を採用するようにしたので、底本の表記が幾分か変更されている。例えば、底本に「神清骨冷て」とあるのは、「神清み骨冷えて」のごとく、活用語尾を送った。

底本に「必此日を」とあるのは、「必ず此の日を」のごとく、それぞれ仮名を送って読み易くした。さらに、「報ひ」は「報ひ」、「まゐる」は「まゐる」とし、ウ音便形「思ふて」は「思うて」のごとく表記した。

また、振り仮名は、本文を読み易くするために、底本にはない所へもかなり多く付した。なお、底本にある振り仮名のうち、林・父など分り易い漢字や、傍注と重なったところなどは、割愛したのも幾分かある。

一、本文の表記のなかで、「ものゝ」は「ものの」、「行くく」は「行く行く」のごとく現行慣用の表記法に統一した。

一、本文中、「峰」と「峯」、「蛇」と「虵」、「不思議」と「不思議」、さらに「すざまじ」・「すざまじ」・「すさまじ」など、さまざまに表記されている語は、作者の執筆の意図を考慮して、統一せず、すべて底本通りとした。

一、底本は、読点とみられる白丸（。）のみで区切り、いっさい段落などはないが、一般読者のために適当に句読点をほどこし、適宜、段落をつけて区切った。また、登場人物の会話の部分は、「」及び『』でかこんだ。

一、『癩癧談』には、各章の冒頭に○印を付すが、これを省略したかわりに、章と章との間を二行あけた。

一、『癩癧談』には、作者自身の手による頭注が次のごとくにある。これらの著者の注を、頭注欄へ

國學者といふ
通者といふ
もたゞいふ
の字業も、

○むひ。そとあひひ。なぬねをを
トもでかたうひ。そなたとていも信
者たち。經濟も。國學家。よちう。せ
とせう。よみ。あふ。く。ひ。俗。あ。と。せ。塵。禪

は置かず、各章中の段落の終りに付すことにした。また、原注の漢文には、送り仮名を付した。

一、本書における校注者による注は、傍注と頭注とからなっている。現代語訳である傍注と、本文をあわせ読めば、一応の意味が分るようにし、より深い理解を必要とする読者に、頭注を参照していただくようにした。

一、頭注欄には、段落ごとに小見出しを色刷りで入れた。*印の個所には、とくに理解をふかめるための資料などを記した。また、頭注に引用した漢文は、すべて訓み下し文とした。

一、頭注及び傍注をつけるに際し、従来の多くの注釈書、研究書からさまざまな恩恵をこうむった。それらのうち『雨月物語』については、次の二著を、とくに参照した。

中村幸彦氏校注『日本古典文学大系56 上田秋成集』昭和三十四年刊

鶴月洋氏著『雨月物語評釈』昭和四十四年刊

また、『癩癖談』については、次の注釈書、研究論文に負うところが多かった。

重友毅氏校注『日本古典全書 上田秋成集』昭和三十二年刊

中村幸彦氏『癩癖談に描かれた人々』（『近世大阪芸文叢談』所収 昭和四十八年刊）

ここに記して謝意を表したい。

一、巻末の「解説」は、作者上田秋成の生涯を理解してから、『雨月物語』『癩癖談』二作品の鑑賞にすすめるように配慮して執筆した。

一、巻末の「付録」には、「雨月物語紀行」として各篇の地理と、『癩癖談』に関係する『伊勢物語』の本文抜萃^{げつさい}を掲載した。

雨^う
月^{げつ}
物^{もの}
語^{がたり}

癩^{くせ}
癬^{もの}
談^{がたり}

雨
月
物
語

一 羅貫中が『水滸伝』を著し、その爲に子孫に三代もの問咥の子が生れたという俗説（『西湖遊覧志余』）。羅子の「子」は男子の敬称。羅子は元末明初の人。

二 紫式部は『源氏物語』を著したので、地獄に墮ちたという俗説（『今物語』）。注一とともに仏教の因果思想より生じた。「媛」は貴女の敬称。

三 悪事をした者が、死後行かねばならない地獄・餓鬼・畜生の三つの世界。

四 「業」は悪業のこと、で、「偏」は迫ること。ここを「けだし業のために偏らるる所のみ」とか「けだし業を爲すことの偏る所のみ」などと訓むこともできる。

五 できる限りの妙趣向をして。

六 「啼」は黙していわない様子。「啼」は鳥の啼き声。鳥が黙ったりさえずったりする様子。文章の調子のととのっていることの形容。

七 高く低く変化することで、文章の流麗なさま。

八 中国太古の弦楽器である瑟の底の穴を言うが、こは作品のよさのために強く感動させることの意味。

九 「事実を千古に見鑑すべし」で、「遠い昔の出来事でありながら、それが目前のものの如く、ありありと写し出されている」の訳、「事実を千古に鑑せらるべし」で、「作中にひそかに作者が寓した事実を現代においても鑑にかける如く明らかにわからせる」の訳、「事実を千古に鑑みらるべし」と訓み、「その当時の出来事を、遠い後の世である今日において、さながら眼前にありありとてらし出して見ることができるような

雨月物語序

羅子水滸を撰して、三世啞児を生み、紫媛源語を著して、一旦悪趣に墮ちるものは、蓋し業の偏るところとなるのみ。然り而して其の文を觀るに、各々奇態を奮ひ、啼啼真に逼り、低昂宛転、読者をして心気洞越せしむるなり。事実を千古に鑑見るべし。余適鼓腹の閑話あり、口を衝いて吐き出す。雉雛き龍戦ふ、自ら以て杜撰となす。則ち之を摘読する者は、固より當に信と謂はざるべきなり。豈醜屑平鼻の報を求むべけんや。明和戊子晩春、雨霽れ月朦朧の夜、窗下に編成し、以て梓氏に畀ふ。題して雨月物語と曰ふと云ふ。剪枝畸人書す。

子虚後人 遊戯三昧

思いがする」の訳などがある。いまは「その作品によつて、千年もの古い昔から、ずつと鑑かんにてらし合せて見られよう」と簡単に訳しておく。

一〇 太平の世のむだばなし。

二 奇怪なことを書いた、という意。『書経』や『易経』などにみられる句。両書ともに、不吉な事の前提であつて、奇怪な現象の意に用いている。

三 いいかげんなものと思う。

四 ひろい読みすること。

五 兎唇うしんや、鼻の平らな者が子孫に生れる報い。

* 『豈醜腎平鼻の報を求むべけんや』の句は、作者に子孫があつたら書けないことである。事実、上田秋成には子孫がなかった。

五 明和五年（一七六八）三月。

六 出版書肆に与えた。「界」は物を与える、の意味。

七 秋成の戲号。剪枝は剪肢や剪指ととり、指の不具なのを、自ら嘲あざわらつた筆名とするのが重友毅氏以来の説であるが、明和八年には「剪枝山人」、明和九年に「三余山人」と、その予告にあるので、版行時の剪枝崎人も枝を切っている変り者という程度の意味であらう。

八 子虚は『文選』巻七の司馬相如の子虚賦に見える虚言をなす人物で、「後人」はその子孫。自らを子虚の子孫とへりくだつて表現している。

九 『五雜俎』に「遊戲三昧之筆」とあり、遊びたわむれることに熱中する、の意味。江戸後期写の『百鬼夜行図』にも「遊戲三昧院」の印があり、一般的。

雨月物語 序

雨月物語 序

羅子撰水滸。而三世生啞兒。紫媛著源語。而一旦墮惡趣者。蓋為業所偏耳。然而觀其文。各々奮奇態。吟呻逼真。低昂宛轉。令読者心氣洞越也。可見鑑事實于千古焉。余適有鼓腹之閑話。衝口吐出。雉雄龍戰。自以為杜撰。則摘読之者。固當不謂信也。豈可求醜腎平鼻之報哉。明和戊子晚春。雨霽月朦朧之夜。窗下編成。以畀梓氏。題曰雨月物語云。剪枝崎人書



* 讃岐で崩御された崇徳上皇と、その霊を供養する西行とを主人公とする「白峯」は、崇徳院に同情する中世以来の庶民感情に基づいて成立した。『山家集』『撰集抄』『異本保元物語』『白峰寺縁起』『四国遍礼霊場記』などが典拠となっている。

一 京都府と滋賀県の境にあった逢坂の関の役人。以下の文は『撰集抄』巻一・第四の「木曾の懸橋。佐野の舟橋など見侍りしに。心もとどまるべき程なり」云々によっている。このような古典の換骨奪胎が、秋成の特色である。

二 現在の名古屋市緑区鳴海町にあった歌枕（古歌に詠まれた諸国の名所）。以下不尽の高嶺・浮島がはら。清見が関（以上静岡県）、大磯・小いそ（神奈川県）、塩竈（宮城県）、象潟（秋田県）、佐野の舟梁（群馬県）、木曾の棧橋（長野県）、西方への旅須磨・明石（兵庫県）、ともに著名な歌枕。

三 高倉天皇の御代一一六八年。仁安二年説もある。

四 難波（大阪）にかかる枕詞。

五 香川県坂出市王越町にあり、海に近い同町乃生に、現在も西行庵と西行腰掛松がある。

六 「筇」は竹の一種。杖を作るのに適する竹であるから、転じて杖の意に用いられる。「植む」は逗留した、意。

七 長い旅路の疲れをいやすためではなく、俗塵にまみれた体を清め、仏法の悟りを得る修行をするための住い。「草枕」は旅にかかる枕詞。

雨月物語 卷之一

白 峯

一 あふ坂の関守にゆるされてより、秋の来た

浜千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不尽の高嶺の煙、浮島がはら、清

見が関、大磯・小いその浦々、むらさき艶ふ武蔵野の原、塩竈の和

たる朝げしき、象潟の蟹が咎や、佐野の舟梁、木曾の棧橋、心のと

どまらぬかたぞなきに、猶、西の国の歌枕見まほして、仁安三年

の秋は、葭がちる難波を経て、須磨・明石の浦ふく風を身にしめつ

も、行く行く讃岐の真尾坂の林といふにしばらく筇を植む。草枕は

一 香川県坂出市松山町^{たけ}青海にあり、標高三三〇メートルで、その頂上北西に崇徳上皇の陵がある。現地では「シロミネ」と呼ぶ人もいるが、江戸新院の陵期の書には「シラミネ」と読むが多い。

二 崇徳上皇。保元の乱後、讃岐へ流された。父鳥羽上皇を本院と言ったのに対して言う。上皇が二人の場合は、本院・新院という。

三 「万葉集」巻十六に「伊夜彦のおのれ神さび青雲のたなびく日すら小雨そほふる」とある。

四 白峰の北側の絶壁をなしている部分を児が嶽という。つまり、一支峰または別の峰ではなく、北壁をさす。「背に聳つ」と表現した秋成は現地を知らない。

五 「仮」は八尺で、谷などの非常に深いことをいう。六 すぐ目の前をも。咫は八寸で一寸は約三センチメートル。尺は一尺で三〇・三センチメートル。

七 「みかさね」と読めば石塔三基で、「みつがさね」と読めば、石を三つ重ねて一体としたものという説もある。現存する陵は、二間四方くらいの方墳であり、「かずら」が今も茂っているという。

八 萩や藁草。

九 正しくは「これなん」とあるべきところ。これが御墓であらうかと、の意。

一〇 「かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひさだめよ」(『伊勢物語』六十九段)による。

一一 紫宸殿は天皇が朝政をとる所、清涼殿は平生お住みになる御殿。

るけき旅路の勞にもあらで、観念修行の便せし庵なりけり。

この里ちかき白峯といふ所にこそ、新院の陵ありと聞きて、拝み

いたしたいものと、十月はじめつかた、かの山に登る。松柏は奥ふ

たてまつらばやと、十月はじめつかた、かの山に登る。松柏は奥ふ

かく茂りあひて、青雲の輕靡く日すら小雨そほふるがごとし。児が

嶽といふ嶮しき嶽背に聳ちて、千仞の谷底より雲霧おひのぼれば、

咫尺をも鬱悵きこ地せらる。木立わづかに間きたる所に、土敏く

積みたるが上に、石を三かさねに畳みなしたるが、荊棘薜蘿にうづ

もれてうらがなしきを、これならん御墓にやと心もかきくらまされ

て、さらに夢現をもわきがたし。

現にまのあたりに見奉りしは、紫宸・清涼の御座に朝政きこつ

ておられたのを、百の官人は、かく賢しき君ぞとて、詔恐みてつかへ

めさせ給ふを、近衛院に禪りまして、藐姑射の山の瓊の林に禁めさせ

給ふを、思ひきや麋鹿のかよふ跡のみ見えて、詣でつかふる人もな

き深山の荊の下に神がくれ給はんとは、万乗の君にてわたらせ給ふ